

氏 名	たけ だ よし き 武 田 良 材
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 439 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	ヘルマン・ケステンのモラリスト ——「二十世紀に独り」——

論文調査委員	(主 査) 教 授 西 村 雅 樹	教 授 若 島 正	准教授 松 村 朋 彦
--------	----------------------	-----------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、1920年代後半から1970年代後半までのおよそ半世紀にわたりドイツ文学界で大きな影響力を持っていた作家・編集者ヘルマン・ケステンの亡命作家としての側面に注目し、モラリストをキーワードに長編小説を中心として読解するものである。楽観主義者を標榜するケステンは、作品を通じてのみならず、作家としての姿勢によっても世界を変えようと試みた。そこでの一貫したテーマがモラリストであった。本論文では、ケステンにおけるモラリストの意味に迫ることで、亡命の中でも活躍し得たケステンの強さの根本が理解できるとされている。

ケステンは1900年、オーストリア＝ハンガリー帝国のガリチア地方、現在はウクライナ共和国に属する町でユダヤ人の商人の家庭に生まれている。幼少期にニュルンベルクに移住したことから、ケステンはニュルンベルクの作家とみなされている。フランクフルト大学の独文科でフリッツ・ランツホフと知り合ったケステンは、ハインリヒ・マンを論じた博士論文を執筆したものの、提出を断念し、劇作家として生きる道を目指した。1927年にグスタフ・キーペンホイアー社の共同出資者となったランツホフと再会したケステンは、同社の原稿審査員に就き、ほぼ同時にランツホフに勧められて処女長編小説を執筆して同社より出版、さらにその直後にユダヤ人のトーニと結婚している。1933年の亡命後はアムステルダムのアレルト・デ・ランジュ社のドイツ語部門を担当、アメリカに渡ると緊急救助委員会の名誉顧問となり、寄る辺ない亡命文学者たちを支えた。1972年には西ドイツ・ペンクラブの会長に就任している。

戦後も亡命文学を擁護する立場を強調し続けたことがケステンの個性の一つに挙げられる。彼は本質的に亡命者であった。生涯の間に生まれ故郷は五度もその帰属を変え、彼とはときにはポーランド人であった。亡命の後には二度とドイツに住むことなく、ニューヨーク、ローマ、バーゼルなどで暮らした。世界中どこにでもあるカフェを定点とした世界市民としての生き方、批判精神と人類の未来への責任感はいネ的で、だからケステンはモラリストと呼ばれる。ただ彼がとりわけ模範とするのはヒューマンで首尾一貫しているレッシングである。そのようなモラリストが彼の作品および彼自身の人生のテーマであった。

ケステン文学を読解する上での困難は、作中に登場する沢山の自称・他称モラリストたちが大抵はアモラルとも言えるという表面的な矛盾である。中でも女たらしたちは惚れた女性の家庭を崩壊させ、ときには彼女らを死に追いやりもするので、それをケステンが必ずしも否定的には描かず、それどころかかなり肯定的に描いているところがしばしば読者を戸惑わせる。長編小説『幸運児』を例に挙げると、妻を奪われ、さらに彼女に自殺されてしまった弁護士ロンダーノも、母を奪われたエットレー少年も、女たらしアモローソを羨望する。それはアモローソが自分の気持ちに素直に生きることのできるモラリストだからである。ルートヴィヒ・フォイエルバハのモラル論の中で、相手を幸福にすると同時に自分が幸福となる性愛がモラルの最高の形態の一つに挙げられているように、アモローソのようなカサノヴァ級の女たらしはモラリストと呼び得る。こうしたモラリストは人類を救うような存在ではないが、モラリストとして生きるのが可能だということを体現する手本としての役割を果たしている。

こうした女たらしを父親的な存在として与えられ、この人物を手本の一つとして、少年が社会を変革するようなモラリストへと成長する姿がケステンのいくつかの作品に書き込まれている。その代表が処女長編小説から四作目までの「ヨーゼフ小説」である。少年『ヨーゼフは自由を求めている』が、そうした真っ直ぐな気持ちを我々のゆがんだ現代社会の中で貫いてゆくと『はみ出し者』にならざるを得ない。逆に言うと、主義を持たない人たちは『幸せな人たち』である。自らの良心を貫くヨーゼフ・パールは、身近な人たちを不幸に、ときには死に追いやりつつ成長する。これも見方によってはアモラルだが、ケステンのモラリストは、その言葉本来の意味、すなわち、生き方を探求する人間なので、良心を貫くのがモラルである。パールは社会が良くなることを信じるジャーナリスト、つまり『ほら吹き』となる。その成長および大人になってからの活動を支えるのがカサノヴァ級の女たらしである叔父で、小説の最後の亡命の瞬間、二人はそっくりに見える。つまりその時、パールは性愛のモラリストと肩を並べる。

第二次世界大戦が始まるまでの亡命の前半期、ケステンはスペインを舞台とする長編小説を書いている。スペインは言語的、地理的に好都合ではなかったため、あまり亡命先には選ばなかったが、第二次世界大戦の前哨戦の舞台として反ファシズムの闘いの最前線だった。ケステンはカトリック両王『フェルナンドとイサベル』、その孫『フェリペ二世』によるユダヤ人その他の異教徒・異民族に対する苛烈な弾圧を再現してみせると同時に、年代記作家カスティリョ、ユダヤ人アブラバネル、秘書ベレスの姿を借りて、作家による独裁者への抵抗を描き出す。特に、亡命者となったベレスは、スペインの独裁体制を暴く文書を世界にばら撒き、さらにフランス王アンリ四世の後ろ盾を得て、史上最大の帝国の支配者であるフェリペ二世を脅かす。ここでは独裁者と闘う作家たちがモラリストである。長編小説『ゲルニカの子供たち』では、ドイツからの亡命作家の語り手と、物語の過半を語ってしまう年不相応に炯眼な少年との二つの視点が、亡命文学者よりも一層困難な避難民の立場と、ファシズムの横暴を傍観する社会の責任とを浮き彫りにしている。こうしてケステンは、ファシズムと闘う善意を読者に要求しているのである。

ニュルンベルク裁判の判決が出された1946年には長編小説『ニュルンベルクの双子』が出版されている。この作品にはニュルンベルク裁判どころかニュルンベルクでのナチス党大会にもニュルンベルク諸法にも言及がないが、第一次世界大戦の直後から第二次世界大戦の直後までを描き、リープクネヒトとルクセンブルクの暗殺、カップー揆、ナチス・ドイツのベルリンと亡命の地パリ、ドイツの強制収容所とフランスの隔離収容所、フランスでのレジスタンスを描き込んだ構成は、ナチズムの時代を歴史小説的な手法で振り返っていると言える。ニュルンベルクでルスト少尉が双子の姉妹ブリムラとウーリと出会うところから物語が始まり、ニュルンベルクで息子のルスト少尉が母ブリムラと再会するところで終わる展開は、読者に歴史の円環的性質を意識させ、より意義深い体験をした息子が最後に登場することで、より良い未来の到来を期待させるという意味において、希望を感じさせる作品に仕上げられている。人々の良心を発現させ、反ファシズムの闘いへと駆り立てるこの上なく善良な人間ウーリは、モラリストの目指すあり方を体現しているとみなしうる。ただし、善良であろうと挑戦する人間がモラリストであって、完成された人間であるウーリそのものはモラリストとは呼べない。

ケステンにおいては独裁に反対するという姿勢が根本的なもので、したがってスターリン主義への反発は早くからあったが、ナチスが敗北した後になって明白な対立を生じさせるようになり、さらにソビエト共産党第20回大会でのスターリン批判を受けて起きたハンガリー革命がソビエトによって弾圧された後には、ヤンカらの投獄を巡って東ドイツの文化相ベッヒャーと公開書簡で応酬するなど、官僚主義という意味でのスターリン主義との闘いが先鋭化した。ブレヒトおよびベンへのケステンの批判がヨーンゾンの反発を招いたミラノ事件が起きた1961年には、共産党とそれに反発するモラリストを描いた長編小説『あるモラリストの冒険』を出版している。この小説ではアメリカのドイツ文学研究者の、1932年から34年にかけての共産党員に取り巻かれたベルリン留学時代と、その後のチェコスロバキア大使シュヴァルツバハおよび元共産党員たちとの交流が描かれている。主人公マークを共産党に引き入れようとするシルヴィアとのアヴァンチュールが物語の軸だが、上からの指令に忠実な共産党員たちに対するマークの批判と、そのように共産党を断固として批判するマークをモラリストと持ち上げて愛するシルヴィアの姿勢がこの小説の核と言える。共産党員対モラリストの図式がありながら、明確にモラリストに軍配が上げられているわけではない。ベッヒャーへの公開書簡で「自立した作家が革命家」だと啖呵を切り、1961年のペンクラブのニュルンベルク講演で、作家をアウトサイダーとして世界を意識すると同時に社会の中心に立つ存在と規定しているように、ケステンのモラリストがいつも文筆に関わっているのは偶然でなく、モラリストの革命性が問われるわけ

だが、この小説からは、党に依存していないことにケステンの主眼があって、モラリストは実際の革命家を超越する存在ではないことが読み取れる。つまりモラリストは何ものにも依存することのできない個人主義者ケステンとしての、それを選択するより他ないという限界を含む目標である。

ケステンは何ものにも依存しなかったものの、1972年から76年にかけて西ドイツ・ペンクラブの会長を務めている。1968年のバリ五月革命の影響からペンクラブでも政治化が進行し、1976年の西ドイツ・ペンクラブの事務総長コッホの失脚による政治化の完成を頂点とする左傾化の動きの中で、争いを仲裁することなく各人の違いを認め、さらにはかなりラディカルであるケステンの下で、西ドイツ・ペンクラブはかつてない政治的で断固たる態度を見せた。1977年に妻トーニが亡くなり、それを機会に、また会長退任とほぼ同時にケステンは文学活動から引退する。ペンで果たした役割から見て、ケステンは生涯を貫いてモラリストであったとみなしうる。今ではケステンの知名度は下がり、ほとんど注目されていないが、ドイツ文学界で大きな存在感を示した人物であり、再び脚光を浴びる機会はあるに違いないとして、論は結ばれる。

論文審査の結果の要旨

本論文において扱われているヘルマン・ケステンは、激動の二十世紀を生き抜いたユダヤ系作家である。1900年にオーストリア＝ハンガリー帝国の東部で生まれたケステンは、幼くしてドイツのニュルンベルクに移り住み、この街で青少年期を過ごした。ベルリンで作家としての地位を確保したものの、ナチスによる支配が始まると、フランスを経てアメリカに亡命せざるをえなかった。第二次世界大戦後再びヨーロッパに戻りはしたが、ドイツに住むことはなく、主にイタリアに居住し、1996年にスイスで生涯を終えた。

ケステンの名はドイツ語圏の読書人には広く知られている。国際的にも、戦後間もない時期には代表作の翻訳を通してかなり知られていた。また、交遊があった同時代の作家についての批評文は、二十世紀のドイツ文学を語る際に引用されることも少なくない。ところが、ケステンの作品そのものを論じた本格的な研究は意外に少なかった。2000年の生誕百年を期に、研究の基礎が整いつつあるのが現状である。そのような状況の中で、論者はケステンの全体像を意欲的に捉えようとした。

ケステンを論じるにあたって中心のテーマとして据えられるのは、モラリストの問題である。モラリストとは、論者によれば、自らの生き方を探求し、社会的な障害を克服して良心を貫き通す人間である。本論文では、作品中の登場人物の分析、ならびに作家ケステン本人の生き方を通して、このモラリストの問題が探求されている。

ケステンの作品に登場する人物をモラリストとして扱うにあたっては、厄介な問題がある。作中の自称・他称モラリストの多くが、アモラルとも言えるという矛盾を示しているからである。なかでも初期の小説『幸運児』から中期の評伝『カサノヴァ』にいたるまで数多く描かれる女たちらは、同時にモラリストでもあるということは、多くの読者をとまどわせる。この矛盾を論者は、女性に全身全霊を捧げる男たちは、相手を幸せにしたいという強い衝動に駆られ、少なくとも性愛という世界においては、モラルを実現しているという意味でモラリストであると説明している。その説明にあたっては、ケステンの高く評価していたフォイエルバハの、相手を幸福にすると同時に自分も幸福になる性愛をモラルの最高形態の一つであるとするモラル論が援用されている。

ケステンの作品には、社会を変革しようとするモラリストも数多く登場する。論者の主たる関心は、このタイプのモラリストに向けられている。その代表とも言えるのが、処女長編小説『ヨーゼフは自由を求めている』から『ほら吹き』までの一連のヨーゼフ小説の主人公である。この人物に、論者は、モラリストという言葉本来の意味である、生き方を探求し良心を貫くという姿勢を見て取っている。

ケステンは亡命中、スペインを舞台とする大部の歴史小説をも二つ著した。これらの小説に関しては、さまざまな著作家の独裁への抵抗が、モラリストとしてのあり方を示すものとして扱われている。また現代のスペインを舞台とする『ゲルニカの子どもたち』に関しては、モラリストとしてファシズムと闘う善意が、テーマの一つとして読み取られている。

第二次世界大戦直後に著された『ニュルンベルクの双子』は、第一次世界大戦直後から第二次世界大戦直後までのドイツ現代史を背景とする大作である。問題作として評価の分かれるこの作品を、論者は、より良い未来の到来という希望を感じさせる作品として好意的に評価している。また、人々の良心に働きかけ反ファシズムの闘いへと駆り立てるウーリという主要登場人物は、モラリストの目指すあり方を体現するとされる一方で、この上なく善良であるこの人物は、すでに完成され

た人間であるためモラリストにはあたらないとみなされている。

ケステンは共産主義国家の独裁的傾向とその体制を支える文学者も厳しく批判し続けた。しかし1961年に発表された『あるモラリストの冒険』においては、共産党員とモラリストが対比されてはいるものの、モラリストの方が明らかによしとされてはいない。論者はこの点を通して、モラリストとは、個人主義者ケステンにとって、革命家を超える存在ではなく、その種のあり方を選択せざるをえない限界を含む目標であったと理解している。

本論文はケステンの作品の分析だけでとどまっていない。作品論を主要な軸としながら、同時にそれと交わる軸として、モラリストとしてのケステンの時代状況との関わりが詳しく扱われている。ケステン本人の生涯ならびに同時代の政治や社会や文化についての鋭い知見も含む記述は、この作家と関わりがあった文学者を研究する者にとってことの他有益である。

ドイツ亡命文学の共産主義的でない側面に関する研究においては、これまでトーマス・マン研究の比重が高かった。そのような研究状況の中で、本論文は、従来の視点とは異なる角度からこの分野に新たな見方を示したのものとして高く評価できる。日本で初めて本格的なケステン論に取り組んだ意義は大きい。

ケステンに関しては完備した全集がまだ刊行されていない中であって、論者は、長編小説すべてを読み解き、先行研究についても、ドイツの大学に収められている修士論文にいたるまでほぼすべての文献に目を通してしている。その労は大いに多とされる。

しかしこのように高く評価できる本論文にも、多少の問題点は指摘しうる。本論文で提示されているケステン像は、やや一面的という感を拭いえない。矛盾を抱え葛藤するケステンについて、もう少し言及されていても良かったのではなかろうか。たとえば宗教に関して言うならば、確かに一般的にはケステンは、ユダヤ教から距離を置く無宗教者と受け止められている。しかし晩年の詩集の書名『我は有りて在る者』やいくつかの発言を通して、ケステンは、旧約聖書に、ことにモーセに強い関心を寄せていたことが窺われる。単純に割り切れないユダヤ教との関係などについても論じられておれば、論の厚みはさらに増したものと思われる。また、引用文の日本語訳に関しては、正確さを期するあまり生硬になりすぎた箇所も見受けられる。ただしこれらの問題点は、本論文の価値を大きく損ねるものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年2月21日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。